

【書評・紹介】

廣田千恵子、カブディル・アイナグル 著

『中央アジア・遊牧民の手仕事 カザフ刺繍 伝統の文様と作り方』

(東京、誠文堂新光社、2019 年 8 月、246mm×185mm、127 頁、1,800 円＋税)

廣田 千恵子



本書はモンゴル国に居住するカザフ人の文化と刺しゅう技法を紹介するものである。とりわけ、カザフ人が壁掛けトゥス・キーズを作る際に用いるかぎ針刺しゅう技法「ビズ・ケステ」について焦点をあてている。

現在、モンゴル国には約 10 万人のカザフ人が暮らしている。彼らは現在のカザフスタンにあたるカザフ草原から移住した人々の子孫である。

カザフ人が継承してきた文化のひとつに、装飾文化がある (廣田 2017)。カザフ人がとくに熱心に装飾する場所は、天幕型住居ウイの内部である。彼らは天幕型住居で使用する家具に刺しゅうや織りといった技法を用いて模様をほどこす (廣田 2015a, 2015b)。

本書の著者のひとりである廣田は、2020 年現在千葉大学大学院博士後期課程に在籍中である。専門分野は文化人類学、地域研究である。廣田はモンゴル国西部バヤン・ウルギー県にてカザフの装飾文化に関する調査を 2011 年から現在に至るまで継続しておこなっている。そのうち、2012 年～2014 年にかけてはカザフ人世帯にて住み込み調査をおこなった。

廣田が長期滞在中にかぎ針刺しゅう技法を習得するために師事していたのがもうひとりの著者の X・アイナグルである。彼女は現地のかぎ針刺しゅう作家のひとりであるが、稀有な技術を有している。一般的に、カザフ刺しゅうをほどこす際は、まず布に下絵を描いてからそれをなぞるように刺す。しかし、彼女は文様の形状を熟知しており、補助線さえ引けば下絵を描かずに直接刺しゅうすることができる。彼女のように刺しゅうを刺せる人は現地でもほぼいない。

アイナグルはまた、同地域において 1980 年代後半以降クロス・ステッチなど外来の刺しゅう技法が流行したことによってカザフ人の間にかぎ針刺しゅう技法が用いられなくなった状態を危惧し、県内各地を回ってカザフ人に対して刺しゅう技法や小物作りを指導した経験もある。

廣田はアイナグルをはじめとするカザフ人女性から学んだかぎ針刺しゅう技法を広めるために、帰国後は NPO 法人北方アジア文化交流センターしゃがに所属し、同法人の活動の一環として 2014 年より全国各地でカザフ刺しゅうワークショップを開催してきた。2018 年 1 月にはアイナグルを日本に招聘して講演会とワークショップをおこない、それ

が本書の制作契機となった。

本書の構成は次の4つの章に大別できる。

第1章は、モンゴル国西部バヤン・ウルギー県に居住するカザフ牧畜民の暮らしと装飾文化の全体像について、現地で撮影された写真と共に紹介している。

元々、カザフ人は遊牧文化を有しており、現在もバヤン・ウルギー県の主生業は牧畜である。装飾文化の維持と牧畜生活は密接に関係している。たとえば、装飾する場所である天幕型住居は牧畜民が季節ごとの移動生活をおこなう上で欠かせない住居である。壁掛けやフェルトの敷物、防砂壁といった模様がほどこされた家具はいずれもその天幕型住居における生活環境を整える役割をもつ。家具に刺しゅうすることはその道具を丈夫にすることに繋がっている。また、家具の材料となるフェルトは羊毛を得られてこそ作ることができる。それゆえに、現地における牧畜生活の現状を知ることは、カザフの装飾文化の理解に役立つ。

第2章は、カザフ文様とかぎ針刺しゅう技法の紹介である。本書のみどころのひとつは、模様図案数の豊富さにある。本書に出ているカザフ文様とその図案は、カザフ人が用いる典型的な文様をもとに、アイナグルが独自のアレンジを加えて制作した。

各文様には名称を記載している。カザフ文様の形状は、主に曲線的である。カザフ人はそうした曲線的な文様に対して「ヒツジの角」や「腎臓」など、家畜の身体部位を表す名称を付与している。とくに、ヒツジはカザフ人にとって衣食住に関わる財産である。人々はヒツジを象徴する文様を家具や衣服など、生活上目につくところにほどこすことによって、自分の家族の生活が豊かになるようにと祈念する。

さらに、本章では実際にカザフ刺しゅうに取り組めるよう、制作のプロセス写真も掲載している。かぎ針刺しゅうの道具は、かぎ針と木枠である。現地においては、かぎ針は自転車のタイヤのスポークや、編み物用のかぎ針の先端、ステンレス製のスプーンの先端などを鉤状に削るなどして用意する。木枠のサイズは幅70センチメートル、高さ1メートル近くと大きい。ただし、本書においては日本でも入手しやすい代用品を紹介している。

第3章は、廣田が現地で収集した約100点の壁掛けの中から厳選した10枚の写真を掲載し、それぞれの布の制作時期、制作経緯、デザイン上の特徴について解説している。

壁掛けに用いられる文様や配置デザイン、寸法、色合いなどは時代に応じて変化している[廣田 2020]。たとえば、同地域において1960年代以降他の社会主義共和国との繋がりが強まると、そうした地域から取り入れられた模様の影響を受けて、「カザフ文様」に限らず「花模様」や「五角形」などの模様も用いられるようになった。

それら模様を配置するデザインも変化した。1950年代から1960年代にかけては大きな長方形の布の中央下に小さな長方形の布を重ね、その範囲に合うように模様を配置していた。しかし、1970年代以降には中央下の長方形布が無くなり、布全体を円形やひし形の補助線で区切り、その形にあわせて模様を描くようになった。こうした時代ごとの変化がわかるように、本章に掲載した壁掛けには制作年代が明らかなものを優先的に選んでいる。

さらに、近年、1990年代以前に作られた古い壁掛け布は観光客へと売却され、年々入手が困難となっている。こうした状況を鑑みると、同書に掲載した写真は過去に制作された壁掛けの記録を残す上でも貴重な資料といえる。

第4章は、第2章で紹介したカザフ文様をワンピースやストール、バッグなどにアイナ

グルが刺しゅうして日本人の生活の中に取り入れるアイディアをその図案と共に例示している。

本書が出版されてから約1年が経過したが、その間 SNS 上で読者から感想が複数寄せられた。ある読者は筆者が各地で開催してきた刺しゅうワークショップへの参加経験はないが、本書をもとにかぎ針刺しゅうに取り組み始めたという。また、本書で紹介した作品を実際に制作し、その写真を掲載してくださった読者もいる。読者のこうした反応を見る限りでは、本書がかぎ針刺しゅうに取り組みたいと考えている人々の一助となり得るものであるといえよう。

また、かぎ針刺しゅう技法はカザフに限らず、キルギスやウズベクなど中央アジアの他の民族の間においても用いられており、使用される文様の形状も酷似している。それゆえに、本書は中央アジア全体の装飾文化を理解する上でもある程度有益な資料となるだろう。

今後は他地域との比較研究を視野に入れつつ刺しゅうや織り、フェルト製作など装飾技法全般に関する理解を深め、その研究結果を広く社会的に発信できるよう精進したい。

参考文献

廣田千恵子

2015a 「カザフの織り テルメ」『Arctic Circle』96:10-11

2015b 「カザフの刺繍壁掛け布 トゥス・キーズ」『Arctic Circle』97:10-11.

2017 「モンゴル国カザフ人の装飾文化」今村薫編『カザフ人の牧畜文化—ラクダ牧畜、文様と装飾—』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書 15:87-150.

2020 「カザフの壁掛け「トゥス・キーズ」の仕様の变化—1950年代から現在まで—」児玉香菜子編『環境変動下における先住民の文化芸術・継承活動とその変遷』千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書 353:28-77.

(ひろた・ちえこ／千葉大学大学院博士後期課程)